

「青春」の詩人・
サムエル・ウルマン記念館
設立プロジェクト

アラバマ州日米協会
副会長 栗倉 健二



"Youth is not a time of life, it is a state of mind."

(青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言うー

サムエル・ウルマン「青春」より)

「この方が、メヤー・ニューフィールドさんです。」有名な「青春」の詩人、サムエル・ウルマンの“お孫さん”を紹介されても、全然ピンとこず。1989年、アラバマ州日米協会のレセプションでのことだった。



メヤー・ウルマン・ニューフィールド氏

その後、いつもロレッタ夫人共々出歩かれるニューフィールド氏と、何回か一緒に食事をしたり、レセプションで同席したりして、友人になった。ニューフィールド氏のミドルネームが「ウルマン」なのだ、という事を知ったのは、ずっと後になってからの事だった。それでやっと実感が湧いた。とにかく、この人が1800年代に活躍した詩人のお孫で、87才にもなるのだ・・・とは、彼を知る人なら誰もが信じられないことだろう。それほど彼は若く、思考も、話す内容も、外見同様かくしゃくとしている。彼は、アラバマ州バーミングハム市の現役弁護士である。

「彼は、青春の詩と共に生きているんです。」
いつ見ても可愛いロレッタ夫人は、言葉少なに笑っている。彼女もまた、サムエル・ウルマンが創立したユダヤ教会での、現役の慈善

活動リーダーである。

詩人サムエル・ウルマンは、1840年にドイツで生まれ、11才までフランスで育った。その後、米国ミシシッピ州に移住。南北戦争を南軍のリー将軍の下で戦い、2度傷を負ったが生還。40才過ぎでアラバマ州バーミングハム市に引っ越して、以来84才で死ぬまで、金物商、教育者、詩人、ユダヤ教のラビ等、広汎な活躍をした。特に教育面では、16年間に亘り市の



ウルマン・ハウスと、その前に佇むメヤー・ウルマン・ニューフィールド夫妻

教育委員長を務め、私財を投じて同地域初の黒人学校を創立。この建物はウルマン・スクールと呼ばれ、今もアラバマ大学バーミングハム校校舎の一部として、若者達に勉学の場を提供している。

ところで、ニューフィールド氏が、孫を代表して管理しているのは、祖父サムエル・ウルマンの墓地と、家具の一部等。家は現在、第三者であるボビー・シドウエル未亡人が所有している。私が、この家をニューフィールド氏の案内で訪問した1992年の夏、旧ウルマン家は「昔のまま」（ニューフィールド氏）の姿で、1903年に建てられたバーミングハム市郊外の現地にあった。

「あの2階右の部屋にお祖父ちゃんは寝起きしててね。」ニューフィールド氏が指さす窓は、当地の豊かな自然、大木の緑に囲まれて、詩人の姿を配するのに相応しいたたずまいに思われた。

「当時は、この2階の左端に、屋根まで登れる太い“つた”の木があった。私の家は、夜、門限を過ぎると鍵がかかって家に入れな

かった。それで遅くなった夜は、“つた”をよじ登って、屋根づたいに右へ。夜も鍵を掛けないお祖父ちゃんの窓から忍びこむ。お祖父ちゃんは耳が遠くて聞こえないから、こっそりとベッドの脇をすり抜けて、自分のベッドルームへ行ったものですよ。」ニューフィールド氏は、さも懐かしそうに、速くを見る目をした。青空のように青いアオカケスが詩人の窓の下に舞い降りて来た。グレーのつややかな毛並みのリスが、ニューフィールド氏の目の前の木の枝で立ち上がり、手に持った木の実をかじっている。ロレッタ夫人も、その風景の中に、ごく自然に溶けこんでいる。

我々3人の訪問者に、気さくに自分の家を見せたシドウエル夫人が、礼を言って辞そうとする私につかつかと寄って来て、何気ない調子で言った。「あなた、この家を買いませんか？ 日本人の学生がこの街にも大勢居る。この家を改造して、日本人の学生の勉学の場にするなり、日米人の憩いの場にするなり……。」私は即座に「これは良い！」と思った。しかし、私にはそんなポケットマネーの持ち合わせが無いし、私が一人占めすべ

【海外プロジェクト紹介】

き物でも無い。

この話をすると、ニューフィールド氏と、アラバマ州日米協会のジョー・ブラックバーン会長とが、「元詩人宅をアラバマ州の文化財兼、日米人の文化交流、憩いの場とし保存する」ため直ちに行動を開始した。「急がなくては！」。同家は、既にシドウェル夫人の手で、街の不動産屋に売りに出されていたのだ。ジョー・ブラックバーン会長は、アラバマ州内の大学で法律学の教鞭をとるかたわら、ニューフィールド氏と同じ法律事務所のパートナー弁護士。法律の専門家でもある。家の買い取りや募金の免税等、法手続きの一切を無償で引き受けると約束してくれた。

アラバマ州政府は、そもそも州知事自身が肝入りで設立し、バックアップしている「アラバマ州日米協会」のプロジェクトであるだけに、全面支援。産業開発局長が州知事と相談し、州政府の外郭団体で目ぼしい関係機関に総当たりし、募金協力を働きかけた。（因みに同局長は、日米協会メンバー募金委員長をボランティアで兼務している。）州政府国際部長は日米協会秘書役を兼務していて、今回のサムエル・ウルマン記念館設立プロジェクトでも、主役の一端を担っている。1993年年初、これらの人々の始動と平行して、アラバマ州日米協会理事会は、同会の主力プロジェクトとして本件を採択。私は、州政府、同協会の両者から、日本側との窓口役を委託された。

このプロジェクトは、ある意味で真に異色である。まず第一に、世界広しと言えども、日本だけで「青春」が著名となっている点そのものが異色である。第2次大戦終結後、日

本に駐屯した米軍のマッカーサー元帥に対し、彼の米国の友人から贈られて、GHQの執務室の壁に掛けられていたのが、日本人に知られるようになった始まりだという。マッカーサー元帥は、この「青春」を愛好し、自分のスピーチの中に引用したり、自室を訪れる人々に紹介したりしたといわれる。その後「青春」は幾多の人々に愛され、その中には、この詩の愛好家グループ「青春の会」の日本全国2,000人の人々がいる。既に販売されたこの詩に関する2冊の本の愛読者も実に十数万人を超えている。今や日本では、「青春」ブームの感がある。詩というものの性格から見て、かくも力強い共鳴者が、このような出版の成功をもたらすのも普通ではない。また、その愛好者の構成が、「圧倒的にビジネスマンが多い」というのも、一般の詩の傾向からして、まことに異色と言えよう。

一方米国では、リーダーズ・ダイジェスト誌が繰り返し掲載し、ワシントンポスト等の著名紙にも、何回も取り上げられたにもかかわらず、従来、日本ほど多数の共鳴者があったとは考えられない。第一、地元アラバマ州の人々ですら、この詩と、詩人について、これまであまり知らなかった。

「詩というものに対する関心が薄い国民性のせい」（アラバマ大学教授）という。

しかし、今回の、サムエル・ウルマン記念館設立プロジェクトについては、大変に盛り上がった。協力者以下の通り

*アラバマ州政府関係者（州知事、産業開発局長、国際部長、etc.）

*州政府外郭団体（アート審議会、歴史審議会 etc.）

* 州立アラバマ大学（総長オフィス、学長、社会学・人間行動科学学部長、日本研究学部長代行等々。これに、この5月出版予定の「サムエル・ウルマンの伝記」著者、アムプレスターさんと、その仲間が加わる。

* ウルマン一族の方々

* アラバマ州実業界グループ

（アラバマ電力社長は\$25,000の寄付を寄せられている。）



サムエル・ウルマンの墓にて、孫のメヤー・ウルマン・ニューフィールド氏と筆者

このような、活発な合同活動の結果、既に第一期募金目標の\$125,000は、メドがついた模様である。

これに対応して、パートナーを組んだ日本側は、前述の本の1つ、「青春という名の詩」の共著者、宇野 関経連会長が音頭をとり、冒頭にあるとおり、宇野収、作山宗久、松下正治、宮沢次郎、盛田昭夫の計5氏が発起人となって、プロジェクトが発足した。

目下、日米双方にて、各\$250,000の同額を目標に募金活動が行なわれています。

ここまで来ると、うれしい事に、もはやサムエル・ウルマン記念館の実現に疑いを持つ人は少ない。ただ、実現の仕方について、多少異なった意見があるばかりだ。

例えば、実現の姿として、地元アラバマの方々の熱意が、より大きく反映されるようにしたい。完成後についても、「世界の文化財」という観点から、より幅広い活用形態を持てるよう、地元アラバマ大学や、バーミングハム市の所有物という色彩を、あまり強く出さないように出来ないか。アラバマ州全体、米

国全体の文化財というつもりで、運営をしてほしい・・・等の希望が、フィランソロピー／メセナに関する、ご経験豊かな方々から寄せられている。

このパートナーシップの活動そのものが、日米親善の具体的成果に結びつくものと信じて、両国パートナー皆様のご成功を祈りつつ、やり甲斐のある「日米窓口担当」の日々が続けている次第である。

これから益々高齢化する日米先進社会の中にあって、私共が「絶えない理想を持って」若々しく生き続けるよう、勇気と励ましとを与えてくれる、この「青春」という詩は、永遠の青春のシンボルであるとも言えよう。

このプロジェクト成功の暁には、サムエル・ウルマン記念館が、多くの日米人の心に強く生きる力を与え、人々の交流・相互理解を助け、私共の子孫の代々まで、末永く愛される事を信じて止まない。

（あわくら けんじ）